



新学期がスタートしました！



令和4年度の新学期が始まり、皆様方には充実した日々をお過ごしのことと存じます。新型コロナウイルスの対応に2年以上を費やし、少しでも対処法のようなものが分かりつつある時、これも世界的重大事件の、ロシアによるウクライナ侵攻が繰り広げられています。

そんな中、マスク生活で自分の顔を出すことを『むり！』という子どもが見かけられるようになり、ニュースには連日戦争のシーンが映し出され、子どもたちの心にどのような変化が現れるのか、注視しなくてはならない危機感を感じる新学期のスタートとなりました。

そういう厳しい現状の中で、育成センターの活動が子どもたちの成長に貢献出来るよう、本年度も小竹・藤井・大島の三人体制で運営していきます。皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。



自立心を育むお手伝い

山陽新聞の暮らし欄に「育む(学ぶ)」という特集が組まれました。その中から放送作家で兼業主夫の杉山錠士さんが書いた～やる気スイッチを押すには～という文章を紹介します。

「やる気スイッチ」なんて言葉がありますが、子どもたちをやる気にするのは本当に難しいですよ。しかも、それがお手伝いとなると、スポーツやお絵描き、歌など好きなものとは違うので、より難しい。

今、高校3年の長女は、保育園の年長からクラシックバレエを始めました。われわれ夫婦が何も言わなくてもスムーズに教室に通い、コンクールなどで良い成績が出るようになってからは、さらにのめり込みました。

好奇心旺盛で、すぐに「やりたい」と言うものの、「飽きた」と言うのも早いタイプの長女。お手伝いに関して3歳くらいから「やりたい」と自分で言いだしました。

しかし、親からすればクラシックバレエこそ例外で、すぐに飽きてやめることは明白。そこで、二つの仮説を基に「お手伝い禁止」というルールを作りました。一つ目は、大人も同じだと思いますが、禁止されていたものが解禁されると、

ものすごくうれしいのではないかといいこと。もう一つは「やりたい」と長く思っていると、「やる気」が醸成されて、簡単にやめなくなるはずだということです。

そしてこの想定は見事に当たりました。小学5年で家事のお手伝いを解禁された後は、自ら洗濯機を回し、時間を見つけて自分が食べたい物を作り。皿洗いも習慣的にやるようになってきました。

ところが、小学4年生の次女には全く通用しません。彼女の性格からすると、もし「お手伝い禁止」と言われたら、「やったー！」と大喜びしたでしょう。そんな次女に効果的だったのが、「隊長制度」。末っ子に多い、認められたい願望が強い次女は、できると認められて任されるとやる気を出します。

お手伝いのやる気を育む方法は、子ども一人一人違うもの。まずはお子さんの特徴をしっかりと観察することが大切なようです。